# 幼児期の自己制御機能の発達（5）

## －親子関係が家庭と園での子どもの行動パターンにおよぼす影響－

A developmental study of self-regulation in preschool children (5)
－ Influences of parent-child relations on the children's behavior pattern －

森下　正康
MORISHITA　Masayasu
（和歌山大学教育学部）

## 要　約

本研究の目的は，(1) 子どもの自己抑制や自己主張の特徴が家庭と園で一致するかどうかについて発達的に検討すること，(2) さらに母親や父親との関係が安定した自己制御機能の発達や養護性・攻撃性の形成にどのような影響を与えるかを明らかにすることであった。和歌山県下の５つの幼稚園と保育園の 3，4，5 歳児を対象に，その子どもの母親と父親，担任教師に評定を求めた。母親と父親に対しては家庭での子どもの特徴（自己抑制，自己主張，養護性，攻撃性）と親子関係の特徴（受容，統制，矛盾，実権）について，担任教師に対しては園での子どもの特徴について評定をもとめた。すべてのデータがそろったのは489組であった。

主な結果は次の通りであった。(1) 家庭と園における子どもの自己抑制や自己主張の特徴は全体としてあまり一致していなかった。年中児は家庭での自己抑制の強さがそのまま園でも出現しやすいのに対して，年長児はそのような傾向は少なかった。自己主張については男子は年長になるほど家庭と園での特徴は一致する傾向があり，特に家庭で自己主張の高い年長児は園でも自己主張の高い者が多かった。それとは対照的に女子は年長になるほど一致しなかった。(2) 受容的で矛盾が少なく統制がゆるやかな両親との関係のなかで安定した自己抑制が形成されるのに対して，拒否的な両親や矛盾の多い統制的な母親のもとでは自己抑制が形成されない。(3) 矛盾の少ない一貫した母親の態度が男子の安定した自己主張を育てるのに対して，矛盾の多い母親や拒否的な父親との関係がその形成を阻害する。女子には有意差がなかった。(4) 家庭と園での安定した養護性の形成には，男子では矛盾の少ない母親の態度が，女子では受容的な両親との関係が関与していた。また拒否的統制的で矛盾の多い両親との関係が場面を越えた高い攻撃性を形成するのに対して，受容的で統制のゆるやかな矛盾の少ない両親との良好な関係が攻撃性の形成を緩和すると考えられる。(5) 子どもが家庭と園という場面によって異なる特徴を示す場合，母親父親のいずれかとの関係や園での先生との関係を反映している可能性がある。

キーワード：自己制御，自己抑制，自己主張，養護性，攻撃性，親子関係，幼児期

## 1．目　　的

自己制御機能（自己抑制・自己主張）の発達の意義についてはすでに述べてきた（森下，2000a, 2000b)。また親子関係が子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかというテーマについて，特に母親と父親の両方の態度パターンと子どもの自己抑制や自己主張の発達との関連について検討してきた（森下，2001)。その中でも触れたように今後の課題のひとつとして，子どもは家庭と園において同じような自己制御の特徴を示すかどうかという問題が残された。すでに指摘されているように，子どもはさまざまな場において，そこで結ぶ人間関係を中心に生活が展開されている（Bronfenbrenner, 1979，小嶋，1999)。いうまでもなく主要な人間関係の対象は，家庭では親やきょうだいであり，園では先生や仲間である。

家庭と園という二つの異なった場面において子どもが示す自己制御の特徴は何か，その特徴は発達的にどのように変化するのか。また，場を越えてある程度一貫した自己制御機能がいつ頃から形成されるのか。さらに，そこに親子関係がどのように影響するのか。このような点を明らかにするために，母親や父親と子どもの関係が家庭と園における子どもの自己抑制のパターンや自己主張のパターンとどのような関連があるかについて検討したい。

自己制御の具体的な働きを知る上で，養護性や攻撃性との関連を探ることが重要だと考えた。すでにこの点について検討した結果，自己制御機能と養護性（思いやり）や攻撃性との間には種々の関連が認められ，自己制御機能の具体的な姿がある程度浮き彫りになったと考えている（森下，2000a, 2000b, 2001)。このような視点から，自己制御機能，養護性，攻撃性のそれぞれについて家庭と園におけるパターンと親子関係の特徴との関連を明らかにしたい。つまり，自己抑制や自己主張の特徴が家庭と園で一致する子どもと一致しない子どもについて，養護性，攻撃性の特徴は何か，そこに家庭での母親や父親との関係がどのような影響を与えるのか，この問題を明らかにすることが本研究の目的である。

## 2．方　　法

基本的にはすでに発表した研究（森下，2001)と共通のデータを用いている。

### 1．調査対象と手続き

和歌山県下の４つの幼稚園と１つの保育園，計759名の幼児が研究の対象となった。一人ひとりの子どもについて，子どもの母親と父親に対して家庭でのようすについて自己抑制，自己主張，養護性（思いやり)，攻撃性に関して評定を求めた。さらに母親と父親に対して，自分と子どもとの関係（受容，統制，矛盾，実権）について自己評定を求めた。質問紙は園児を通じて配布された。また各園児の担任に対して，一人一人の子どもの園でのようすについて自己抑制，自己主張，養護性，攻撃性について評定を求めた。保護者や園の先生方の協力の下に90％以上のデータが回収された。そのうち母親・父親・保育者のすべてのデータがそろったのは489組であった。その内訳を表１に示す。

調査時期：2000年　７－８月。

表１　分析の対象者数

| | 男児 | 女児 | 計 |
|---|---|---|---|
| 年長児（５歳児） | 93 | 90 | 183 |
| 年中児（４歳児） | 83 | 90 | 173 |
| 年少児（３歳児） | 63 | 70 | 133 |
| 計 | 239 | 250 | 489 |

2．用いた尺度

子どもの特性について，自己抑制・自己主張・攻撃性についてはこれまでの研究（森下，2001a,200b,2001）と同じ項目を用いた。思いやりに関しては小嶋ほか（1988）の養護性研究と森下（1985）の研究をもとに作成した。親の評定に関しては３件法（はい・？・いいえ）を用いた。担任による評定には，自己抑制と自己主張に関しては４件法（３非常にそうだ・２かなりそうだ・１ややそうだ・０ちがう），思いやりと攻撃性に関しては５件法（４非常によくある・３よくある・２ときどきある・１たまにある・０ない）を用いた（森下，2001）。

親の養育態度については，小嶋ほか（1988）の作成した受容尺度（10項目），統制尺度（10項目），実権尺度の一部（５項目）と，鈴木ほか（1985）の作成した矛盾尺度の一部（５項目）を用いた（森下，2001）。この養育態度は子どもに向けた親の一方的な態度というよりは親子の相互作用の中で形成されたもので親子関係を反映している。

【子どもの特性】

(1)　自己抑制：つらくても我慢するという「我慢」の因子と，やりだしたら最後までがんばるという「頑張り」の因子の二つからなっている（森下，2002)。14項目。

(2)　自己主張：ここでの自己主張は，よい意味での自己主張で自己表現力といいかえてもいいものである。正しいと思うことは人の前で話すことができ，いやだと思うことは拒否できるという「正当な要求」の因子と，自らすすんでものごとに取り組む「自主性」の因子の二つからなっている（森下，2002)。13項目。この自己主張と自己抑制の両方をあわせて自己制御とよび，この二つがバランスよく発達することが自己制御機能の発達にとって望ましいと考えている。

(3)　養護性（思いやり）:動物や植物を育てたり，自分より小さいもの，弱いものの世話をしたり面倒をみたりする特徴で養護性（nurturance）といえるものである。８項目。

(4)　攻撃性：活動的で行動が荒々しく，乱暴で，他の子を傷つけたりする傾向である。８項目。

【親の養育態度】

(1)　受容：子どものことが好きで，子どもの気持ちや行動をよく理解し，優しく受け入れるという特徴である。優しさや愛情の豊かさを示す。

で冷たい態度を示す。

(2)　統制：親自身の気持ちや，欲求を強く子どもに押しつける特徴である。子どもに口やかましく指図したり，叱ったりする傾向。

(3)　矛盾：親の態度が時と場合によってころころと変わる程度を示している。一貫性のない矛盾の多い傾向。

(4)　実権：子どものしつけや教育に関して実権（リーダーシップ）を持っているのは父母どちらかを測定している。得点が高いほど評定者自身の方が実権をもっていると認知していることを示す。

## 3．結　　果

1．家庭と園での行動パターン

家庭での子どもの特徴は母親の評定に基づいて，園での子どもの特徴は担任教師（保育士）の評定に基づいている。家庭での子どもの特徴と園での子どもの特徴がどの程度一致しているかを明らかにするために，各尺度得点について両者間の相関係数を求めた。その結果が表２に示され

ている。男女に共通して，自己抑制，自己主張，攻撃性は有意であるがあまり高くない相関であり，養護性についてかなり低い相関であった。

表２　家庭と園における特性の相関

| 性＼特性 | 抑制 | 主張 | 養護性 | 攻撃性 |
|---|---|---|---|---|
| 男　子 | .373** | .423** | .131* | .272** |
| 女　子 | .447** | .415** | .180* | .297** |

*p＜.05　**p＜.01

以上の結果は家庭と幼稚園での子どもの行動特徴はあまり一致していないとみることができる。このことは同時に母親と担任教師の評定の信頼性の問題でもある。これまでの研究（森下，2000a, 2000b, 2001)で明らかにしてきたように，各評定尺度のα係数が高い値を示していることから尺度の信頼性は認められる。したがって，このような一致の低さはそれぞれの場面での子どもの特徴を反映しているものと考えられる。

家庭と園での子どもの特徴相互の関係が，年齢と共にどのように変化するかをより明らかにするために，母親評定と担任評定による男女別年齢別の尺度得点の中央値を用いて，得点の高い群（H群）と低い群（L群）の二つに分類した。各群の尺度得点の平均値（SD）と中央値を表３に示す。それらの群を組み合わせて次のような４つのパターン（群）を作った。得点が家庭で高く園でも高い群（HH群），家庭で高く園で低い群（HL群），家庭で低く園で高い群（LH群），家庭で低く園でも低い群（LL群）。男女別年齢別にその出現率を示したのが図１である。

表３　子どもの特性の中央値と平均値（SD）

| 年齢＼特性 | | 男子 抑制 | 男子 主張 | 男子 養護性 | 男子 攻撃性 | 女子 抑制 | 女子 主張 | 女子 養護性 | 女子 攻撃性 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 家庭 | 年長 中央値 | 18 | 20 | 12 | 5 | 21 | 18 | 13 | 3.5 |
| | 平均(SD) | 17.45(5.58) | 18.87(5.27) | 12.23(2.70) | 5.45(3.69) | 20.18(4.96) | 17.48(5.50) | 13.06(2.40) | 3.99(3.05) |
| | 年中 中央値 | 16 | 19 | 12 | 4 | 18.5 | 18 | 13 | 4 |
| | 平均(SD) | 16.71(6.72) | 18.34(5.76) | 11.78(3.19) | 5.14(4.10) | 17.84(6.12) | 17.44(4.99) | 12.76(2.58) | 4.98(3.46) |
| | 年少 中央値 | 14 | 19 | 11 | 6 | 16.5 | 19 | 13 | 5 |
| | 平均(SD) | 15.21(5.02) | 18.30(5.15) | 11.10(2.87) | 6.43(3.68) | 15.93(5.33) | 18.33(5.35) | 12.06(3.00) | 5.37(3.61) |
| 園 | 年長 中央値 | 26 | 26 | 15 | 3 | 33 | 22.5 | 15 | 1 |
| | 平均(SD) | 26.63(9.29) | 23.87(9.31) | 15.57(5.01) | 5.88(5.98) | 31.51(8.65) | 21.87(9.78) | 14.56(6.37) | 2.71(3.88) |
| | 年中 中央値 | 24 | 21 | 12 | 6 | 29 | 23.5 | 14 | 3 |
| | 平均(SD) | 22.72(10.29) | 20.22(11.16) | 11.43(5.91) | 8.40(7.70) | 27.23(9.66) | 21.54(12.23) | 13.61(6.31) | 5.36(5.80) |
| | 年少 中央値 | 22 | 23 | 10 | 8 | 27 | 24 | 11.5 | 3.5 |
| | 平均(SD) | 20.13(9.39) | 21.51(9.84) | 11.84(7.05) | 9.08(7.10) | 26.33(9.26) | 23.00(9.78) | 12.31(5.77) | 4.50(4.32) |

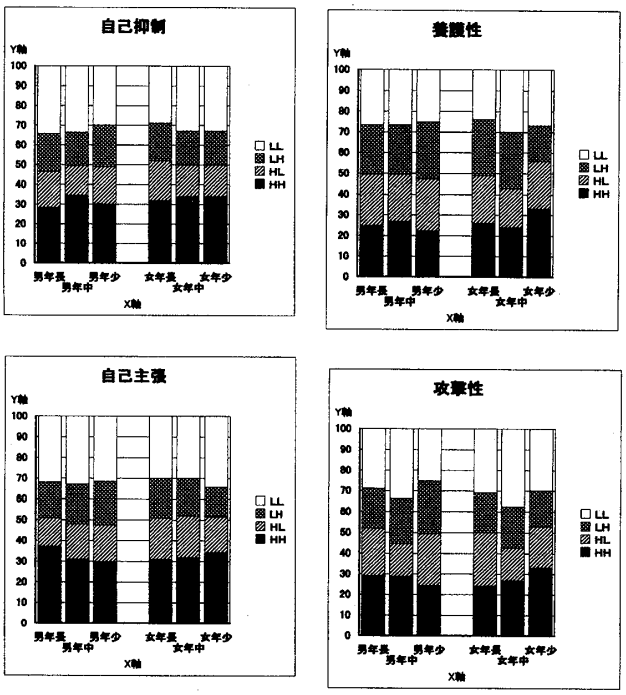



図１ 男女別，年齢別の４パターンの出現率

全体の中で，家庭と園での特徴が一致している子ども（ＨＨ群とＬＬ群）の比率をみると，養護性の値が低いのが分かる。男女別年齢別に，各パターンの出現率について$\chi$２検定を行った。その結果，自己抑制について男子では年中児に，女子では年少児と年中児に有意差がみられた。家庭と園での特徴が一致している子どもの比率は男子の場合，年中児は年少児や年長児と比較して値が高かった。それに対して，女子では年齢が進むにつれて一致率が低下していた。自己主張について出現率に有意差のみられたのは男子では年長児，女子では年少児であった。男子では年齢が進むと共に一致率が上昇しているのに対して，女子ではそれが低下していた。養護性については有意差はみられず，各群共に出現率が25％前後とほぼ均一になっていた。ただ年少女子のＨＨ群の出現率は比較的高かった。攻撃性ついて有意差のみられたのは年中女子のみであった。男女共に年中児の一致率が比較的高かった。

２．自己抑制・自己主張と養護性・攻撃性との関連

自己抑制と自己主張のそれぞれのパターンによって養護性と攻撃性の強さが異なるかどうかを検討した。そのために男女別に４群（ＨＨ，ＨＬ，ＬＨ，ＬＬ）の養護性と攻撃性の尺度得点についてそれぞれ分散分析を行った。その結果，自己抑制に関してはすべての特性について有意差がみられた。自己主張に関しては家庭における攻撃性以外はすべて有意差がみられた。そこで，有意差のみられたものについてさらにTukeyの方法によって多重比較を行った。そのような分析の結果，有意差のみられたものについて相対的に記述すると次のようになった。

（１）自己抑制と養護性・攻撃性

男子の結果（図２）

・家庭での養護性：ＨＨ群やＨＬ群は高く，ＬＬ群やＬＨ群は低かった。

・家庭での攻撃性：ＬＬ群やＬＨ群は高く，ＨＨ群やＨＬ群は低かった。

・園での養護性：ＨＨ群は高く，ＬＬ群やＨＬ群は低かった。

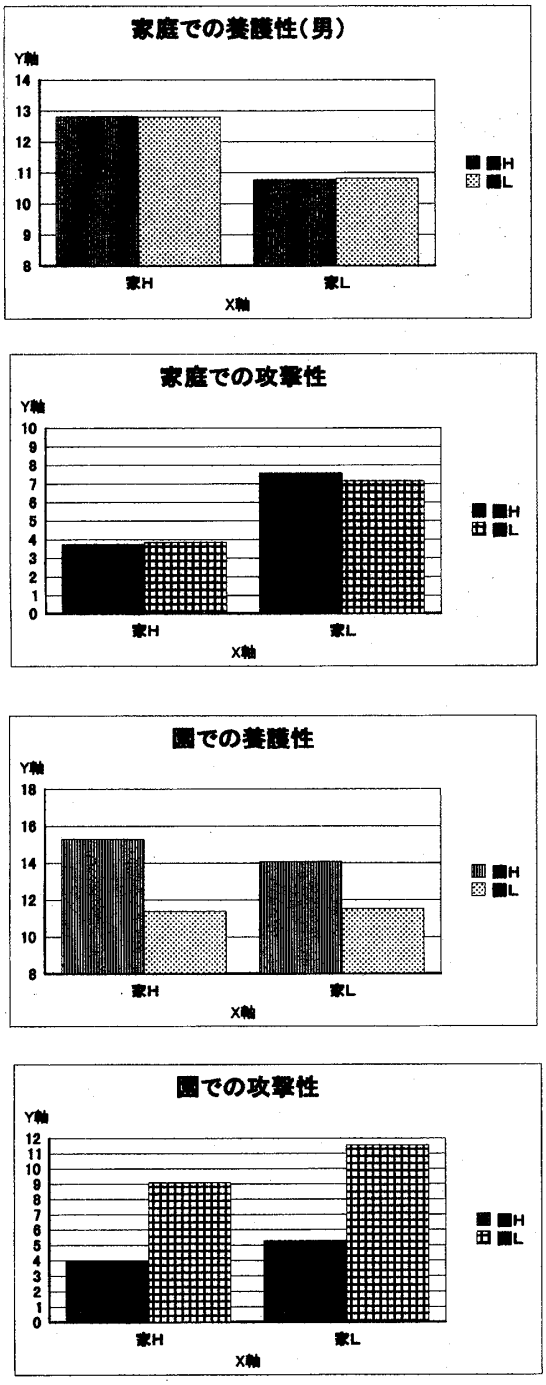



図２　自己抑制パターンと養護性，攻撃性（男）

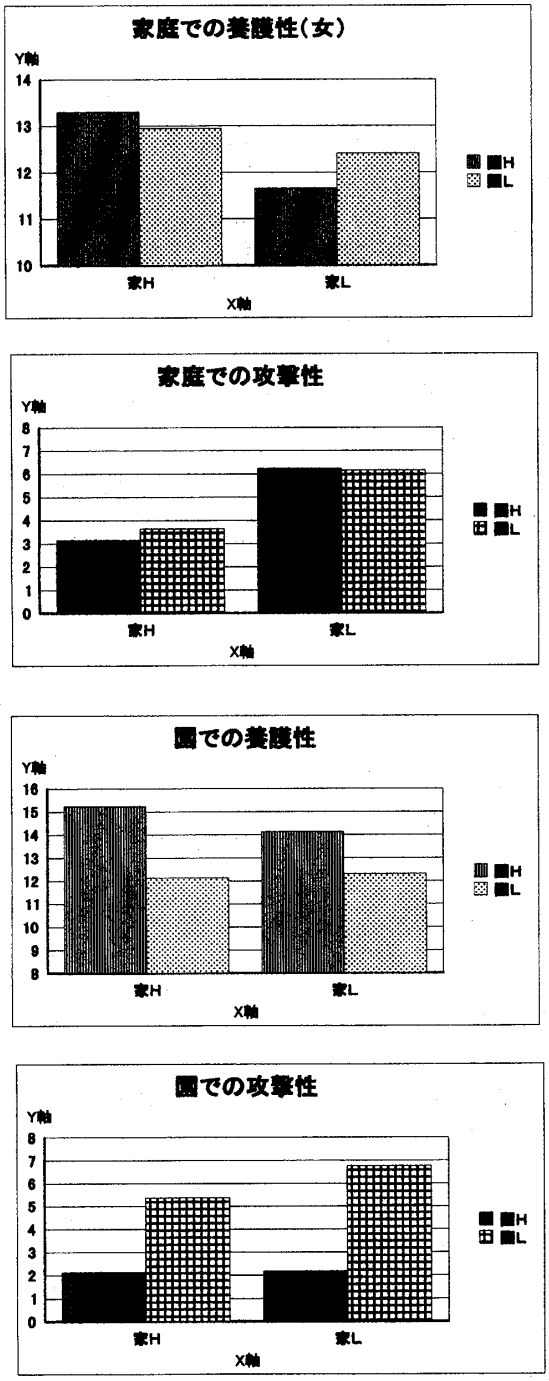



図３　自己抑制パターンと養護性，攻撃性（女）

・園での攻撃性：ＬＬ群やＨＬ群は高く，ＨＨ群やＬＨ群は低かった。

以上，家庭と園での場面における自己抑制の高さは，それぞれの場面における養護性の高さと関連しており，それぞれの場面における自己抑制の低さはそれぞれの場面における攻撃性の高さと関連していた。その中で注目すべきは，ＨＨ群が特に園において養護性が高いのに対して，ＬＬ群が園において攻撃性が非常に高いという結果であった。

女子の結果（図３）

・家庭での養護性：ＨＨ群は高く，ＬＨ群は低かった。

・家庭での攻撃性：ＬＬ群やＬＨ群は高く，ＨＨ群やＨＬ群は低かった。

・園での養護性：ＨＨ群は高く，ＬＬ群やＨＬ群（家庭・園）は低かった。

・園での攻撃性：ＬＬ群やＨＬ群は高く，ＨＨ群やＬＨ群は低かった。

以上，ほぼ男子と同じような結果であった。また男子と同じようにＨＨ群は特に園において養護性が高いという特徴があった。ＬＬ群は家庭でも園でも攻撃性が高いのが特徴であった。注目されるのは，家庭おける養護性は園での自己抑制の高い群にのみ有意差がみられ，ＬＨ群の家庭での養護性の低さであった。

（２）自己主張と養護性・攻撃性

分散分析の結果，家庭における攻撃性以外はすべて有意差がみられた。

男子の結果（図４）

・家庭での養護性：ＨＨ群やＨＬ群は高く，ＬＬ群は低かった。

・園での養護性：ＨＨ群とＬＨ群は高く，ＬＬ群とＨＬ群は低かった。

・園での攻撃性：ＬＨ群の高さが特徴的であった。

以上，それぞれの場面における自己主張の高さと養護性の高さが関連していたが，家庭と園の

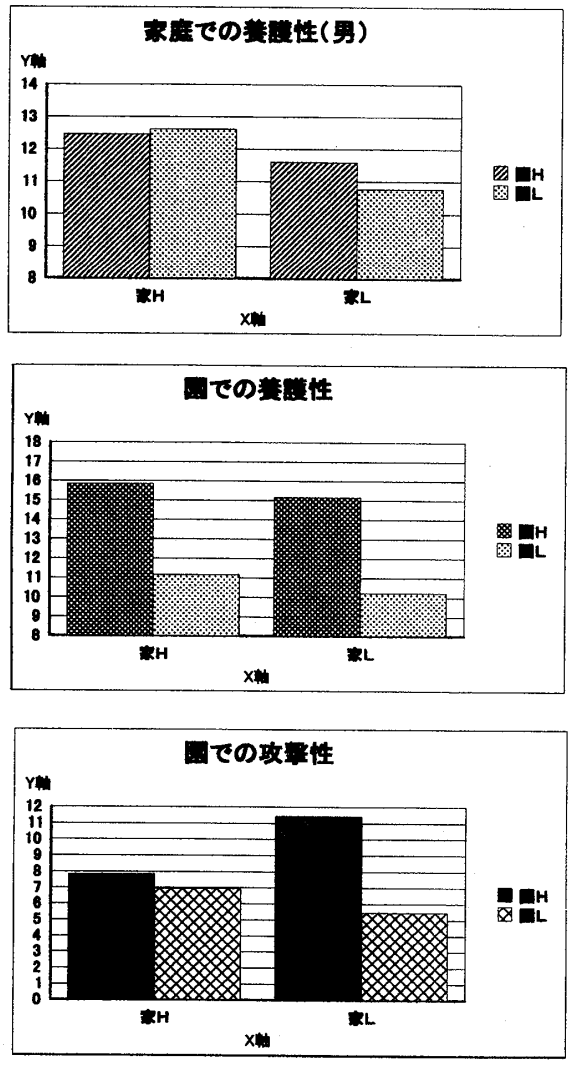



図４　自己主張パターンと養護性，攻撃性（男）

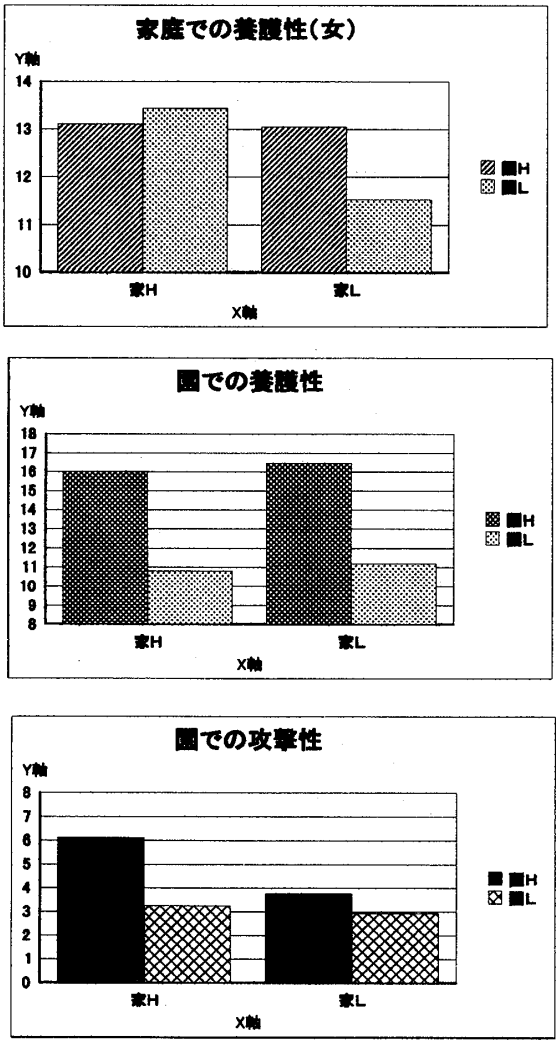



図５　自己主張パターンと養護性，攻撃性（女）

いずれにおいても，ＬＬ群の養護性の低さが特徴であった。さらに，ＬＨ群は園において攻撃性がきわめて高いことが特徴であった。

女子の結果（図５）

・家庭での養護性：ＬＬ群の養護性の低いことが特徴であった。

・園での養護性：ＨＨ群とＬＨ群は高く，ＬＬ群とＨＬ群は低かった。

・園での攻撃性：ＨＨ群の攻撃性の高さが特徴的であった。

したがって，ＬＬ群は家庭における養護性が低いということ，ＨＨ群は園における養護性が高い反面，攻撃性がきわめて高いという点が特徴であった。

## ３．子どもの行動パターンと親子関係の特徴

子どもの特徴が親子関係の特徴を反映しているのではないかと考え，次のような分析を行った。子どもの自己抑制，自己主張，養護性，攻撃性それぞれの４群（ＨＨ，ＨＬ，ＬＨ，ＬＬ）について，親子関係（夫婦関係を含む）の特徴（受容，統制，矛盾，実権）それぞれを比較し分散分析を行った。分散分析の結果，有意差のみられたものについては先ほどと同じようにTukeyの方法により多重比較を行った。男女別年齢別に親子関係に関する平均値とＳＤを表４に示す。

表４　母親と父親の養育態度の平均値（SD）

| 養育態度 / 年齢 | | 男子 受容 | 男子 統制 | 男子 矛盾 | 男子 実権 | 女子 受容 | 女子 統制 | 女子 矛盾 | 女子 実権 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 母親 | 年長 | 15.44(2.00) | 10.72(3.12) | 3.40(1.99) | 4.68(2.50) | 15.20(2.38) | 9.68(3.18) | 2.59(1.99) | 5.63(2.56) |
| | 年中 | 15.30(3.09) | 10.22(3.41) | 3.16(2.08) | 5.57(2.24) | 15.29(2.58) | 10.09(2.99) | 3.17(1.97) | 5.47(2.45) |
| | 年少 | 15.79(2.68) | 10.46(3.24) | 3.08(1.98) | 5.86(2.06) | 15.97(2.14) | 9.50(2.96) | 3.16(2.15) | 5.51(2.52) |
| 父親 | 年長 | 14.71(2.85) | 10.57(3.34) | 3.25(2.35) | 4.26(2.21) | 15.18(2.77) | 8.76(3.36) | 2.91(1.92) | 3.37(2.14) |
| | 年中 | 14.92(3.15) | 9.19(3.41) | 3.35(2.04) | 3.59(2.19) | 15.03(2.88) | 10.13(3.10) | 3.16(2.16) | 3.50(2.41) |
| | 年少 | 14.76(3.21) | 9.92(3.21) | 3.76(2.34) | 3.52(2.27) | 15.03(2.85) | 9.33(3.24) | 3.19(2.14) | 3.69(1.92) |

### （1）自己抑制と親子関係

有意差のみられたものについて相対的に記述すると次のとおりであった。

男子の結果（図６）

・母親の受容：ＨＨ群は高く，ＬＨ（家Ｈ園Ｌ以下同じ）群やＬＬ群は低かった。

・母親の矛盾：ＨＨ群は低く，ＬＨ群やＬＬ群は高かった。

・父親の受容：ＬＬ群は低く，ＨＨ群やＨＬ群は高かった。

・父親の矛盾：ＬＨ群は高く，ＨＬ群は低かった。

・父親の実権：ＨＬ群は高く，ＨＨ群は低かった。

以上，ＨＨ群の母親は受容的で矛盾が少なかった。また，ＨＨ群の父親は受容的で，実権得点が低かった。ＨＬ群の父親は受容的でかつ矛盾が少なく，実権得点が高かった。ＬＨ群の母親も父親も矛盾が多かった。ＬＬ群の母親は受容的でなく（相対的に拒否的）矛盾が多く，さらに父親も拒否的であった。

女子の結果（図７）

・母親の受容：ＨＨ群やＨＬ群は高く，ＬＬ群やＬＨ群は低かった。

・母親の統制：ＨＨ群やＨＬ群は低く，ＬＬ群は非常に高かった。

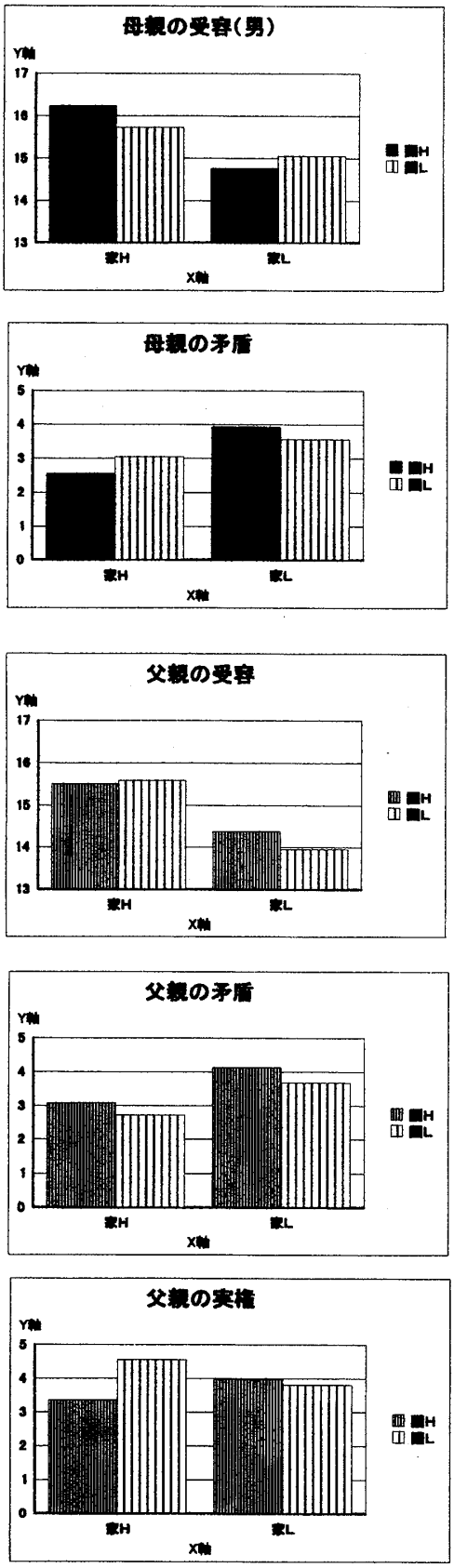



図６ 自己抑制パターンと親子関係（男）

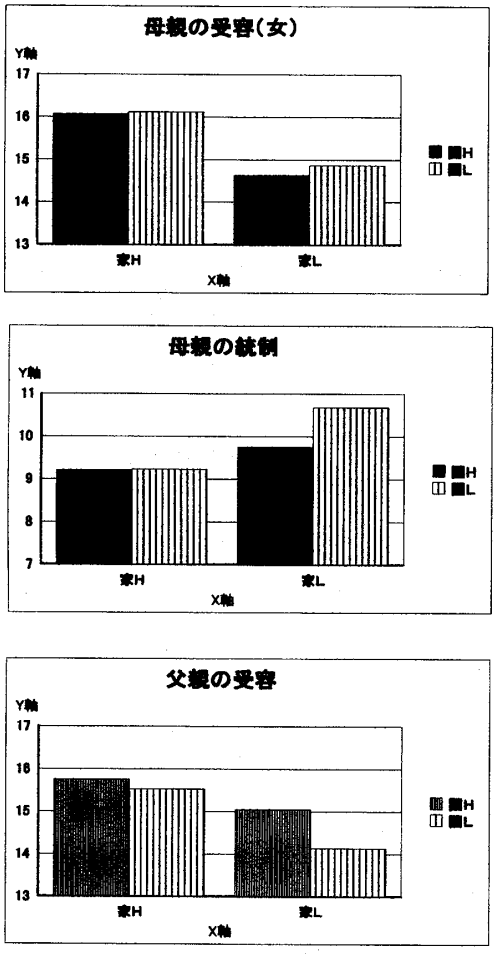



図７ 自己抑制パターンと親子関係（女）

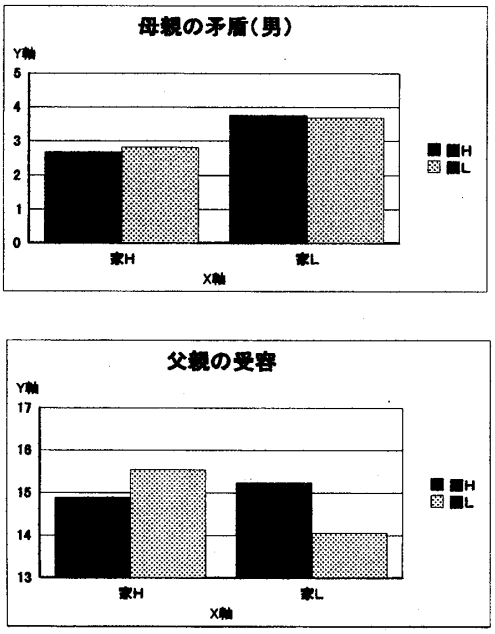



図８ 自己主張パターンと親子関係（男）

・父親の受容：ＨＨ群とＨＬ群は高く，ＬＬ群は低かった。

以上，ＨＨ群の母親は受容的で統制がゆるく，父親も受容的であった。ＨＬ群の母親もＨＨ群の母親と同じように受容的で統制がゆるく，父親も受容的であった。ＬＨ群の母親は拒否的であった。ＬＬ群の母親は拒否的で非常に統制的であり，父親もきわめて拒否的であった。

（2）自己主張と親子関係

男子の結果（図８）

・母親の矛盾：ＬＨ群とＬＬ群は高く，ＨＨ群とＨＬ群は低かった。

・父親の受容：ＨＬ群は高く，ＬＬ群は低かった。

したがって，ＨＨ群の母親は矛盾が少なかった。ＨＬ群の母親は矛盾が少なく，父親の受容が高かった。ＬＨ群の母親は矛盾が多かった。ＬＬ群の母親は矛盾が多く，父親は拒否的であった。

女子については有意な結果はなかった。

（3）養護性と親子関係

男子の結果（図９）

・母親の統制：ＬＨ群は高いのに対して，ＨＬ群は低かった。

・母親の矛盾：ＬＬ群は高く，ＨＨは低かった。

・父親の受容：ＨＬ群は高いのに対して，ＬＨ群は低かった。

・父親の矛盾：ＬＨ群は高く，ＨＨ群は低かった。

以上，ＨＨ群の母親も父親も矛盾が少なかった。ＨＬ群の母親は統制がゆるく，父親は受容的であった。ＬＨ群の母親は統制的で，父親は拒否的で矛盾が多かった。またＬＬ群の母親は矛盾が多いのが特徴であった。

女子の結果（図10）.

・母親の受容：ＨＨ群とＨＬ群は高く，ＬＬ群とＬＨ群は低かった。

・父親の受容：ＨＨ群は高く，ＬＨ群は低かった。

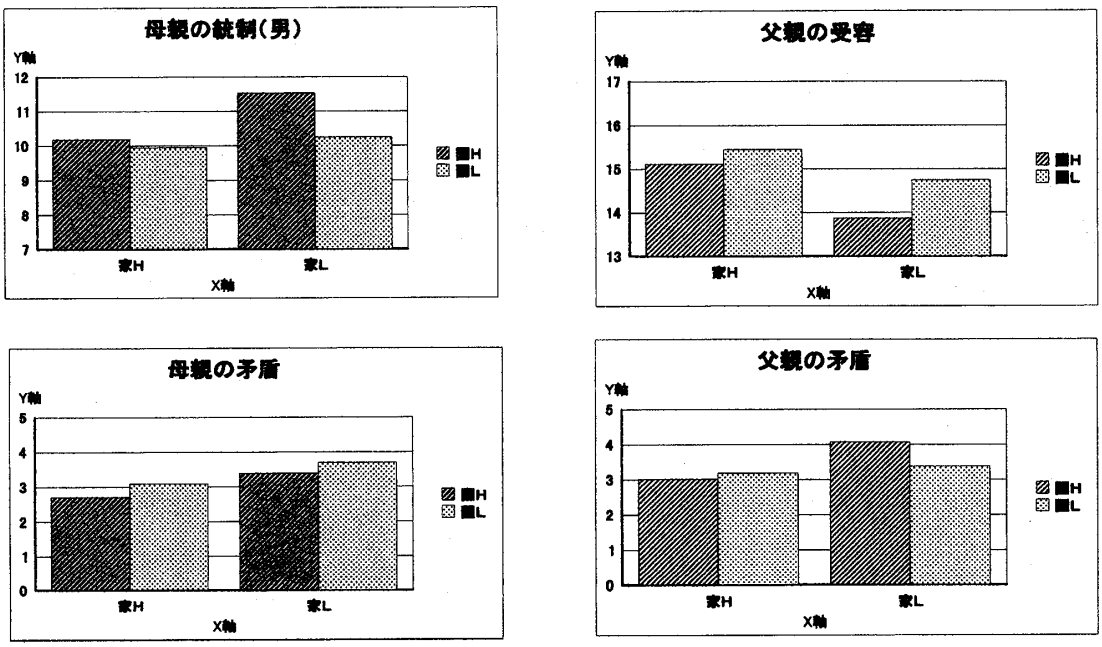
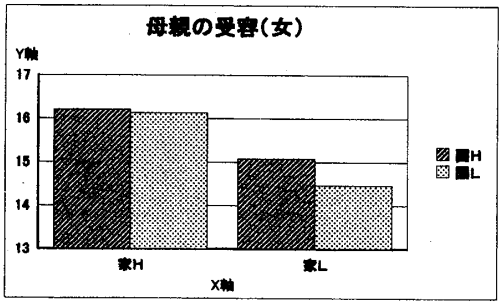



図９　養護性のパターンと親子関係（男）



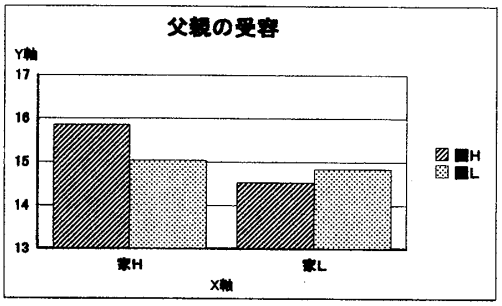
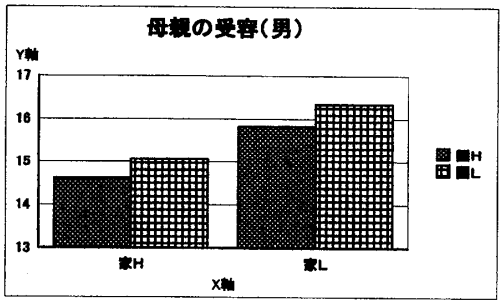
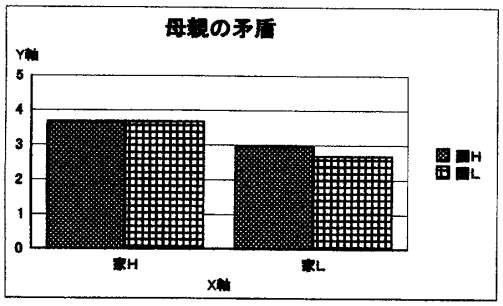




図10 養護性のパターンと親子関係（女）



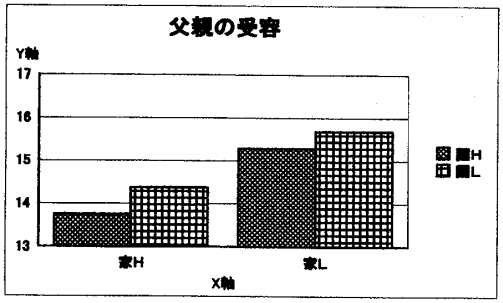
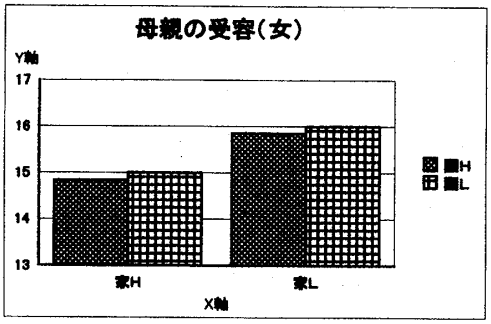
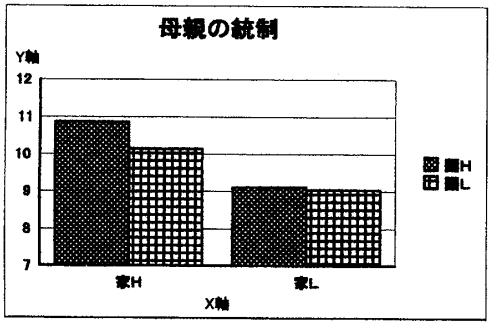
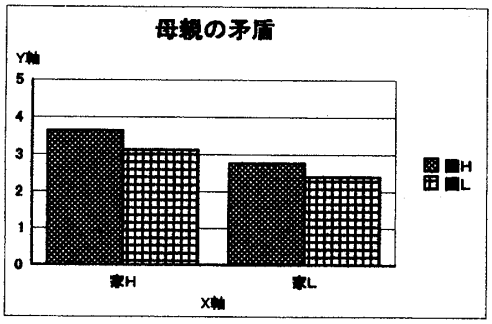




図12 攻撃性のパターンと親子関係（女）



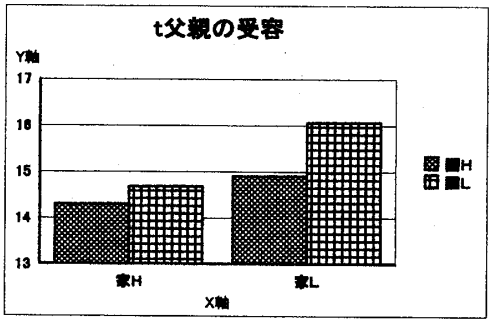




図11 攻撃性のパターンと親子関係（男）

したがって，ＨＨ群の母親も父親も受容的であるのに対して，ＬＨ群の母親も父親も拒否的であった。ＨＬ群の母親は受容的であるのに対して，ＬＬ群の母親は拒否的であった。

（4）攻撃性と親子関係

男子の結果（図11）

・母親の受容：ＬＬ群とＬＨ群は高く，ＨＨ群とＨＬ群は低かった。

・母親の矛盾：ＨＨ群とＨＬ群は高く，ＬＬ群は低かった。

・父親の受容：ＬＬ群とＬＨ群は高く，ＨＨ群は低かった。

以上，ＨＨ群の母親は拒否的で矛盾が多く，さらに父親も拒否的であった。ＨＬ群の母親は拒否的で矛盾が多かった。ＬＨ群の母親と父親は共にやや受容的であった。ＬＬ群の母親は受容的でかつ矛盾が少なく，さらに父親も受容的であっった。

女子の結果（図12）

・母親の受容：ＬＬ群は高く，ＨＨ群は低かった。

・母親の統制：ＨＨ群は高く，ＬＬ群やＬＨ群は低かった。

・母親の矛盾：ＨＨ群は高く，ＬＬ群は低かった。

・父親の受容：ＬＬ群は高く，ＨＨ群やＨＬ群は低かった。

以上，ＨＨ群の母親は拒否的で統制的でかつ矛盾が多かった。さらに父親も拒否的であった。ＨＬ群の母親には特徴はないが父親は拒否的であった。ＬＨ群の母親は統制がゆるやかであった。ＬＬ群はＨＨ群とは対照的に母親が受容的で統制がゆるく矛盾も少なかった。さらに父親も受容的であった。

## 4．考　　察

子どもの行動パターンの特徴

一般的に家庭と園での子どもの行動特徴は一致しないという結果であった。特に養護性の一致率は低いものであった。自己抑制と自己主張に関して，行動パターンの出現率は類似しており，ＨＨ群とＬＬ群はそれぞれ約30%，ＨＬ群とＬＨ群はそれぞれ約20%であった。次に，年齢の変化につれて行動パターンがどのように変化するかに注目した。

自己抑制に関して，年少の女子と年中の男女は家庭と園で行動が一致するパターン（ＨＨ群とＬＬ群）の出現率が高かった。つまり比較的年少の子どもでは家庭での自己抑制の強さがそのまま園でも出現しやすいといえる。しかし，年長女子ではそのような傾向はやや弱まっていると考えられる。

自己主張に関して，家庭と園での行動が一致するパターンの出現率は，男子の場合は年少・年中から年長にかけて上昇していた。年長児のこの上昇の源はＨＨ群の増加であり，女子に比較してもＨＨ群の出現率は高いものであった。この結果は男子はより自己主張が期待されるという社会的文化的背景のなかで，後に述べるように母親の一貫した態度や期待がＨＨ群出現率を高めているのではないか。それとは対照的に女子の場合は年少から年中・年長にかけて一致パターンの出現率は低下していた。特に年少女子に一致パターンが多いのが特徴であった。

養護性に関して，男女共にすべての学年に出現率に有意差がなかった。年齢の上昇にともなって男女共に各群の出現率がより均一の方向（25%）に近づいている。家庭と園での子どもの養護性には一貫性がないといえる。

攻撃性に関しては，年少男子の４パターンの出現率がほぼ25％ずつになっていたのが特徴である。年少男子は場面によって異なった攻撃反応を示すと考えられる。それに対して年少・年中女子は年少男子に比較してＨＨ群とＬＬ群の出現率が比較的高くなっていた。特に年少女子は家庭での攻撃性の高さが，年中女子は家庭での攻撃性の低さがそのまま園でも出現する可能性が高い。年長女子の４パターンの出現率の特徴は年少男子のそれに比較的よくにており，場面によって攻撃性のレベルが異なるといえよう。

以上，いくつかの興味深い結果が示された。自己抑制については男女共に年中児の方が年長児よりも家庭と園で行動の一致するパターンが比較的多かった。それはなぜなのか。自己主張に関しては家庭と園での一致パターンは男子では年長の方が，女子では年少の方が多いという特徴があった。また，攻撃性についても年齢ごとのパターンの出現率に性差がみられた。このように性差があるとすれば，子どもにとって自己主張や攻撃性のもつ社会的文化的意味を問う必要があるだろう。その場合，研究対象の年齢を広げることも視野に入れなければならない。

親子関係と子どもの行動パターン

（１）自己抑制

家庭でも園でも自己抑制の高い子ども（ＨＨ群）は，男子も女子も一般に養護性が高く攻撃性が低かったが，特に園場面における養護性が高いという特徴があった。このような男子の母親は受容的で矛盾が少なく，父親も受容的で実権得点が低かった。また，同じようにＨＨ群の女子の母親は受容的で統制がゆるく，父親も受容的であった。したがって，このような受容的で矛盾の少ないおだやかな親子関係のなかで安定した自己抑制や養護性が形成され，その反対に攻撃性が抑制されると考えられる。

それとは対照的に，家庭でも園でも自己抑制の低い子ども（ＬＬ群）は，男女共に家庭でも園でも養護性が低く攻撃性が高かった。特に男子の園での攻撃性がきわめて高いという特徴があった。このような子どもの母親と父親は共に拒否的であり，さらに男子の母親は矛盾が多く，女子の母親は非常に統制的であった。したがって，母親や父親との拒否的な関係，さらに母親の矛盾の多さや統制の強さのもとで子どもは自己抑制や養護性を形成できず，親子関係で生じる強いストレスやフラストレーションが場面を越えた強い攻撃性，特に園での強い攻撃性を生じさせると考えられる。

また，自己抑制が家庭では低いが園では高い女子の場合（ＬＨ群），家庭では養護性が低く攻撃性が高いのに対して，園ではその反対に養護性が高く攻撃性が低かった。この群では母親の受容性のみが低かった。ＬＨ群とＬＬ群との共通点は母親の受容の低さにあったが，その違いはＬＨ群では母親の統制が強いわけでなく父親の受容も低いわけではないという点にあった。このような拒否的な母親に対しては自己抑制や養護性を示さないが，園では自己抑制や養護性を示していると解釈される。その際，父親の情緒的なサポートと園の先生とのよい関係が作用している可能性があると考えられる。

養護性や攻撃性に関して女子のＬＨ群と対照的なのが，男子のＨＬ群であった。男子ＨＬ群の母親は平均的で，父親は受容的で矛盾が少なくかつ実権をもっていた。このＨＬ群とＨＨ群の大きな差異は父親の実権の強さにあった。男子はそのような強いリーダーシップをもつ父親のいる家庭では自己抑制や養護性が高く攻撃性が低い，そのような父親のいない園ではその反対に自己抑制や養護性が低く攻撃性が高いのだろうか。ＨＬ群の女子の親の特徴はＨＨ群の親と区別がつ

かなかった。

（2）自己主張

家庭でも園でも自己主張の高い（HH群）男子は，家庭でも園でも養護性が高いという特徴があった。HH群の男子の母親は態度に矛盾が少ないという特徴があった。一貫した母親の態度が，子どもの安定した自己主張や養護性を育てているのだろう。

それとは対照的なＬＬ群の男子は，家庭と園のいずれにおいても養護性が低いという特徴があった。その母親の特徴は矛盾が多く，父親は拒否的であった。母親の矛盾した態度や父親の拒否的な態度が相互に影響し合って子どもの自己主張の発達を阻害していると考えられる。

家庭では自己主張が高く園では低いＨＬ群の男子の特徴は，家庭では養護性は高いが園では低いという特徴であった。自己主張が養護性の高さを規定しているようにみえる。その母親の特徴は矛盾が少なく父親は受容的で，ＬＬ群とは対照的であった。

男子ＬＨ群の特徴は園での養護性は高いが，園での攻撃性が非常に高いという特徴があった。自己主張が家庭において抑圧されている男子が，園での自己主張と共に攻撃性を高めているところにその特徴がある。自己抑制が十分に育っていないか，自己主張が社会化されていない点に問題があると考えられる。ＬＨ群の母親の特徴は矛盾が多いが父親はやや受容的であった。ＬＨ群とＬＬ群との共通点は母親の矛盾であり，異なった点はＬＨ群の父親は受容的だという点であった。このように，母親の態度に問題があるが，父親との関係が良好な場合は園場面において自己主張を示すのであろうか。

女子の親子関係については４群間に有差差が認められなかった。家庭でも園でも自己主張の高い（HH群）女子は，家庭や園での養護性が高く，さらに，園での攻撃性が非常に高かった。ＬＬ群の女子は，家庭や園における養護性や園での攻撃性がすべて低いという特徴があった。このようにあらゆる場面での自己主張の低さは自主性や主体性の乏しさを反映しているだろう。ＨＬ群の女子は家庭での養護性が高いのに対して園での養護性が低く，ＬＨ群の女子は家庭と園での養護性が高く園での攻撃性が低いという特徴があった。このＬＨ群とＨＨ群の共通点は家庭でも園でも養護性が高いのに対して，相違点はＨＨ群の攻撃性の高さであった。このようなＨＨ群の園での攻撃性の高さは男子にはない特徴であった。なぜ女子の一貫した自己主張の高さが園での攻撃性の高さと結びついているのであろうか。

（3）養 護 性

家庭でも園でも養護性の高い男子(HH群)の母親と父親は共に矛盾した態度が少なかった。それに対してＬＬ群の男子の母親は矛盾が多いのが特徴であった。ＨＬ群の男子の母親は統制がゆるく，父親は受容的であった。それとは対照的に，ＬＨ群の男子の母親は統制的で父親は拒否的で矛盾が多かった。以上のように，男子について母親に関しては矛盾，統制という親子関係の次元が，父親に関しては受容という次元が関係している。つまり，家庭での男子の養護性の高さは態度の一貫した，統制のゆるやかな，受容的な親子関係を，家庭での養護性の低さは矛盾した，統制的な，拒否的な親子関係を反映しているようである。家庭と園の両方において男子の安定した養護性に関与してるのは母親の態度の一貫性であった。園での養護性を規定している要因については不明である。

ＨＨ群の女子の母親も父親も受容的であるのに対して，ＬＨ群の場合は母親も父親も拒否的であった。また，ＨＬ群の母親は受容的なのに対して，ＬＬ群の母親は拒否的であった。このように男子とは異なって，女子の場合は親の受容次元が養護性の重要な規程要因として働いているら

しい。少なくとも両親のどちらかと良好な関係がある場合は家庭での養護性が高く，その反対に良好な関係がない場合は家庭での養護性が低い。両親と子どもとの関係がよい場合，子どもは一貫した養護性を形成するらしい。ただし，両親と子どもとの関係が拒否的な場合，幼稚園でなぜ女子の養護性が高いかについては十分に説明できない。そこには園での先生との関係が関与している可能性がある。

（4）攻 撃 性

男子の場合，ＨＨ群の母親が拒否的で矛盾が多くかつ父親も拒否的なのに対して，ＬＬ群の母親はそれとは対照的に受容的で統制がゆるく矛盾が少なく父親も受容的であった。このように母親や父親とのよくない関係が場面をこえて高い攻撃性を形成していると考えられる。すでに述べたように，そこには親子関係をめぐるストレスやフラストレーションが関与しているだろう。ＨＬ群の母親は矛盾が多く拒否的であったが父親には問題がなかった。ＬＨ群は母親も父親も受容的であった。このように良好でない親子関係が家庭での攻撃性の高さを規定しているようであるが，園での攻撃性に変化をもたらす要因は不明である。

女子の場合，ＨＨ群は母親が拒否的，統制的，矛盾した態度を示し，父親は拒否的であった。ＬＬ群の女子の場合は親子関係の特徴がＨＨ群とは正に対照的であった。つまり両親とのよくない関係が場面をこえて一貫した攻撃性を形成し，両親との良好な関係が一貫して攻撃性を緩和させているのは男子と同じであった。ＨＬ群の女子の父親は拒否的であるが母親には問題がなかった。ＬＨ群の母親は統制がゆるやかであるが父親には特徴がなかった。つまり，ＨＨ群やＬＬ群のように一貫した攻撃性の水準を示す場合は両親と子どもとの関係を反映し，ＨＬ群やＬＨ群のように場面によって異なる攻撃性を示す場合は片方の親との関係を反映しているようにみえる。

以上，自己抑制と自己主張のパターンのそれぞれと，養護性および攻撃性との関連について特筆すべき結果が示された。自己抑制について，男子も女子もＨＨ群は特に園での養護性が高いのの対して，ＬＬ群は園での攻撃性が非常に高いという特徴があった。自己主張については，男子ではＬＨ群が女子ではＨＨ群が，園での養護性と共に園での攻撃性が非常に高かった。このような特徴についてある程度説明できるものもあったが，説明できないものもあった。

家庭と園での子どもの自己抑制，自己主張，養護性，攻撃性の特徴が，一貫して高い場合や低い場合は親子関係の特徴でもってある程度説明のつくことが多かった。しかし，子どもが家庭と園で異なった行動パターンを示す場合はその理由がわからないものが多かった。すでに指摘したように園での先生との関係や仲間関係との関係という変数を扱ってない点に大きな問題があった。園での子どもの特徴を理解するためにはそのような変数をいれる必要がある。家庭での親子関係が子どもの自己抑制や自己主張の形成の重要な要因になっているらしいということは確かであるが，家庭だけでなくそれに園での経験や学習が統合されて子どもの自己制御機能が発達するものと考える。これは今後の課題である。

付記：本研究を進めるに当たり，和歌山中央幼稚園，じろうまる保育園，湯浅幼稚園，ぶっとく幼稚園，紀南幼稚園の園長先生をはじめ先生方，保護者の方のご協力を得ました。こころよりお礼申し上げます。

## 引用文献

Bronfenbrenner, U. 1979 The Ecology of Human Development －Experiment by Nature and Design
（磯貝芳郎・福富 護 訳 1996 人間発達の生態学 川島書店）

小嶋秀夫 1988 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究 昭和62年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書

小嶋秀夫編著 1999 人間発達と心理学 金子書房

小嶋秀夫・内山伊知郎・宮川充司 1988 家族関係調査（ＦＲＩ）手引き＜暫定版＞ 名古屋大学教育学部教育心理学教室

森下正康 1985 幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング －教師モデルに関する受容的－拒否的態度の認知の影響－ 心理学研究, 56, 138-143.

森下正康 2000a 幼児期の自己制御機能の発達(1)－ 思いやり，攻撃性，親子関係との関連－ 和歌山大学教育学部紀要（教育科学），50，9-24.

森下正康 2000b 幼児期の自己制御機能の発達(2)－ 親子関係と幼稚園での子どもの特徴 － 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要，10，117-128.

森下正康 2001 幼児期の自己制御機能の発達(3)－ 父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか － 和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要，11，87-100.

森下正康 2002 幼児期の自己制御機能の発達(4)－ 園と家庭における縦断的研究 － 和歌山大学教育学部紀要（教育科学），52，1-12.

鈴木眞雄・松田 惺・永田忠夫・植村勝彦 1985 子どものパーソナリティ発達に影響をおよぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する尺度構成 愛知教育大学研究報告，34, 139-152.